

# 読者の心象風景としての〈白い河床〉

——井上靖『猟銃』について——

セリンジャー（朝さろん）

朝さろんの本棚〈61〉…2016年7月14日（木）

〈エロスとタナトス〉

## 1 女性独白体・書簡体

《個人的なことが政治的なこと》——女性運動のフリーズ

本作には四つの書簡が登場する。登場順に、三杉稷介、薔子、みどり、彩子である。このうち三杉の手紙が非常に短く、作品を構成するのは主に三人の女性の手になる手紙である。三つの女性独白体によって作品が語られている、と言い換えることもできる。

しかし、女性独白（書簡）体を採用されてはいるものの、実際にこ

の小説を書いている作家は男性である。男性作家が、奥方やあるいは年若い娘に創造的に同一化して語り直しているのがこれら三つの書簡だと見える。そしてそこには、七十年近く前の男性（作家）が文化的・制度的な枠組みの中で形成してきた女性の見方や価値観が大きく映り込んでいるだろう。だからこの作品を二〇一六年に読むとき、読者によっては現在とはかなり異なる男女の生活様式や前時代的、男性中心主義的なふるまいが目につくという人も当然いるだろう。

だが、より重要なことは、二十一世紀のわれわれの目からみて、それでも現代に通じるようなセクシュアリティやエロスといったものが本作のどこにどう表現されているかを適切に見極める点にこそあ

朝さろん 61st morning

〈エロスとタナトス〉

『猟銃』井上靖

## 2 詩人〈私〉の心象風景としての〈白い河床〉

るだろう。

たとえば彩子の自死について、不倫がみどりに知られ(てい)たという事実のもたらす衝撃の大きさと、門田の再婚という事実のもたらした衝撃のどちらが本当に大きいものであると作品から読み取れるだろうか。あるいは、そのどちらか一方を自殺の決定的要因であると判断することは可能か。このような読みと解釈によって得られた彩子像は、現代の〈エロスとタナトス〉をめぐる価値観のなかでどういう風を受容できるだろうか。

母である彩子と、敬愛していた三杉の二人から裏切られたという薔子が抱えた傷心と孤独は、現代の読者の価値観にどのような揺さぶりをもたらすだろうか。

そして三杉の不倫を知らながら彩子と親しく交際を続け、自身は自身の性愛を社交のなかで充足させようとしていたみどり。彼女の書簡によって暴露された不義理と背反の三杉への強烈な執着はどうか。

こうした三者三様の作中女性突きつける問いに対してひとつひとつ向き合ってみることで、本作が持つ普遍的な部分と、同時にどうしようもなく古びてしまった旧時代的な価値観という双方を確認することができるだろう。

作中では三杉穰介を中心として、彼を取り囲む三角形のように、みどり、彩子、薔子という三人の女性が配されている。しかし本書における構成ではここにもうひと捻りが加わる。

語り手である詩人の〈私〉が、詩人的想像力で山中で見かけた獵人・三杉穰介の中に〈落莫たる白い河床〉を凝視する。そしてその〈白い河床〉の実態がなんであったかを種明かしするかのようになり、三杉が三通の手紙を寄越してくる。〈私〉は、それら三人の女性の手になる書簡を読み、それらの手紙を受け取るようになった三杉穰介というひとりの男のことを、今度は三通の手紙から知り得たことを再構成しながら思い浮かべる。そして、〈私〉自身が最初に凝視した三杉の〈落莫たる白い河床〉がなんであったのかを、手紙を読んだ後の時点から捉えなおそうと試みる、というのが全体の構成になっている。

重要なのは、三杉以上に読者に対して情報が伏せられているこの〈私〉という詩人についてである。彼が三杉に〈落莫たる白い河床〉を凝視したのは詩人としての直観である一方、同時にそれは〈私〉自身の心象風景の投影であった、と見るべきだろう。三杉自身は自らの中にある荒涼としたものを〈白い河床〉とは名指していない。それをそう名付けたのは詩人である〈私〉に他ならない。そして〈私〉が名付けた〈落莫たる白い河床〉という一文にひどく感銘を受けたのが三杉なのである。ここで両者は、〈白い河床〉という共感点を間に挟んで向き合っている。三杉の抱える内面の荒涼や孤独は、〈私〉の

抱える内面の孤独や荒涼でもある。

しかしそれは〈私〉もまた、三杉のように不倫をしている(た)ということを通じて直接意味しない。それは想像が過ぎるというものだろう。そうではなく、十三年間愛し続けた彩子という女性を喪った悲しみ、その彼女の胸の中に常に門田という前夫がいたという事実が突きつけるもの、薔子にもたらした影と彼女からの拒絶、妻みどりからの離縁の督促と、彼女の中にあつた己への愛憎半ばの執着——三杉が抱え込んだこういう諸々の感情がもたらす寂寥感が、「いい年をして未だに詩の同人誌から足を洗えないで、自己流の詩を作っている」〈私〉の中に気づかず眠っていた茫漠たる寂寥感孤独を呼び覚ますことになったのではないだろうか。

読者は〈私〉になつた気分で、〈落莫たる白い河床〉という暗喩の裡に、読者それぞれの意識の上に流れこんだ三人の女性と三杉の人生を解釈し、意味づけし直すということになる——これはそういうテクストである。だからこそ、〈私〉が直観視した〈白い河床〉とは、読者ひとりひとりにとっての〈白い河床〉と文字通り同義になるのだ。

### 3 戦中から戦後という作品の舞台設定

本作は、三杉穰介が彩子と不倫の恋をはじめた昭和九年(1934)

年から、その彩子が自ら命を絶つた作品内現在である昭和二十二年(1947)までの十三年間を舞台としている。作品が発表されたのが昭和二十四年(1949)であることを考えれば、作品内現在である昭和二十二年というのは、実際に本作が執筆されていた時期とほぼ同じ(同時代といって差支えない)だろうと推測できる。登場人物それぞれの生い立ちや背景はつぶさに語られているわけではないが、共通するのは使用人を複数人雇えるような裕福な暮らしをしていること、宝塚の人間やジョッキーと交流するなど社交界へ出入りするような階級に属していることなどが随所から窺い知れる。彩子からの手紙のなかで、GHQの公職追放措置によって三杉穰介が実業界を去ることになったことが触れられているが、この点からも作中人物たちの大物ぶりが垣間見える。

昭和九年は日本が暗く長い戦争へと加速度的に傾斜していく時代の足音を聞いている時期であるが、そのような時代の様子は作品の背景へと退けられ、直接的に描写されることは少ない。そのような時代的背景がありながらも、彩子と入り婿である門田との結婚が、門田の不倫と子どもの誕生によって終わったという個人的な歴史の方に焦点が当てられている。そしてこの年から、三杉穰介と彩子との不倫の恋が始まる。そして作品内現在である昭和二十二年とは終戦後でもない時期であり、GHQが日本国を実効支配している時期でもある。

こうしたことを考え併せると、登場人物それぞれの手紙の前面には出てこないが、戦中から戦後すぐの時期にいたる混乱や喪失、戦

ある佐藤春夫は「自分は席上での「獵銃」を採るか「闘牛」をかの意

を推し、一人を除いたほかの六人は「闘牛」を推した。井上靖の師で

いて興味を持ってみるのも面白いだろう。それはそのまま、小説

を通して見る現代日本の社会史とでもいうものに他ならない。

さて、この第二十二回芥川賞を受賞したのは「獵銃」ではなく「闘

牛」である。井上靖は当時四十二歳。選考委員九人中二人が「獵銃」

を推し、一人を除いたほかの六人は「闘牛」を推した。井上靖の師で

ある佐藤春夫は「自分は席上での「獵銃」を採るか「闘牛」をかの意

#### 4 芥川賞候補作「獵銃」

後に起こった価値観の変化といった時代の風が、この十三年のあいだ常に吹いていただろうということを念頭においておくべきであろう。よしんばそれが不倫に至ったことを正当化するものではないとしても、戦争という巨大な暴力のなかで、登場人物それぞれがよけいに孤独を深めていく原因の一端であったことは想像に難くない。

見が出た時、一議なく闘牛説であった。年若な読者でない限り「獵銃」は誰しもあまり好まない作品だと思つたものである。「闘牛を新聞社内部を描いたものとして見るか、恋愛小説としてみるかという意見も両立する。自分は恋愛小説と見る側である。」と評し、川端康成は「闘牛」を推薦した。「しかし、「闘牛」の推薦に大した感動も冒険もなかった。なんだか常識で片づいてしまったようなあつけなさが残つた。」「私には「獵銃」は取れなかった。(中略)しかし「闘牛」を選ぶ支えにはなつていた。」と語っている。

ただ一人、井上靖の作品に反対を付けた宇野浩二は「なるほど、こんどの数篇の候補作品のなかでは、『うまさ』という点だけで見れば、ぶぬけていた。ただ、私には、出てくる人物たちが、みな、自分の意志ではなく、作者の『かんがえ』どおりに、思考し、行動しているのが、気になった。大衆小説ふうの興味があり芸術味にかけているのが『いや』であった。」と指摘しているが、読者は宇野のこの意見に賛成だろうか、反対だろうか。(選評の引用は『芥川賞全集 第四巻』昭和五十七年(一九八二年)五月・文藝春秋刊より)

#### 5 作品解説 『獵銃』について

作品は、〈私〉が発表した散文詩「獵銃」を冒頭におき、三通の書簡を配する形式で小説的世界を展開する、書簡体の体裁である。主

## 6 井上靖の文学について

題は、編中に挿入された散文詩「獵銃」にある。〈私〉は、中年の獵人に〈どこか落莫とした白い河床〉を見るが、それは、いわば人生が背負う、ある種の孤独である。また、〈白い河床〉の象徴するイメージは、〈近代的な意味で言うニヒリズムともちがう。また仏教的な無常観ともちがう。人生に対する、単に退嬰的な諦念ともまたちがう。それらがすべてとかかわり合う、一種の深く沈潜した運命観〉（福田宏年『井上靖評伝』集英社、昭和五十四・九）とも言えるであろう。「闘牛」の主人公津上は、闘牛大会の開催に奔走する行動人であるが、彼もまた、「獵銃」に言う〈白い河床〉を歩む人間であり、「黯い潮」（『文芸春秋』昭和二十五・七・十）の主人公速水、「ある偽作家の生涯」（『新潮』昭和二十六・十）の芳泉など、彼らもまた、それぞれの〈白い河床〉を、その人生の背景として生きる人物たちである。人生における孤独や運命を〈白い河床〉とイメージ化する作品世界は、のちの「樓蘭」「敦煌」などの歴史小説へと発展的に受け継がれて行くものであり、井上文学の核となる。〈白い河床〉とは、敗戦直後の日本人の心象風景であり、井上靖の心象風景でもある。（以上、『新研究資料現代日本文学第二巻 小説Ⅱ』（明治書院、二〇〇〇年）より）。

漱石・藤村とならぶ（近代日本には稀有な国民文学者）（奥野健男）。抒情性と物語性を兼ね備えた新しい型の小説家として出発し、また卓越したストーリー・テラーとして多くの新聞小説に成功をおさめた。更に、新しい型の歴史小説を展開し、つぎつぎと秀作を送り出した。若い時期から詩に親しみ、小説家として大成したのちも詩の作品を発表し続け、その点、稀有の作家である。

井上靖の文学を、私小説に独占されていた抒情と大衆文学に任されていた物語性という二つの要素を総合し得たもの、と位置付けたのは、中村光夫「井上靖論」（『現代作家論』新潮社、昭和三十三・十）であるが、今日、この見解は、ほぼ定説化している。

山本健吉には、井上靖の作品系統として、「獵銃」に抒情的作品の原型、「闘牛」に叙事的作品の原型を見る見解（『井上靖文庫第二〇巻』解説、新潮社、昭和三十六・二）がある。これを踏まえつつ、福田宏年は、〈白い河床〉を軸として「獵銃」の遁世的な姿勢と「闘牛」の行動的な姿勢とが、からみ合って井上文学の作品世界を構成して行くとした。また、この二面性は、作品のみでなく、井上家の家系にも見られるとし、その環境に注目している（『井上靖評伝』）。

井上文学の本質については、良識性や健全性を言うことが一般的であるが、奥野健男は、井上文学は漱石以来、待望久しい国民文学としながらも、〈しかし、漱石の内部、あるいは藤村の内部が必ずしも健全で良識的あるいは倫理的でなかったように、井上靖の内部も明るく良識的ものではなかった。〉と、その内面に踏み込んだ作家論を展開する（「井上靖論序説」（『現代の文学』12 井上靖）巻末作家

【あらすじ】

昭和二十二年。詩人の〈私〉は、「獵銃」という散文詩を、小さな雑誌に発表した。その詩は、初冬の天城路で出会った獵人の持つ、どこか〈落莫とした白い河床〉に心惹かれた、という作品である。ところが、掲載後、二か月程後、三杉穰介なる未知の読者から、一通の手紙が届いた。三杉は、〈私〉の散文詩を読んで、そこに登場する中年の獵人は自分であろう、と述べ、ついでには〈私〉という人間が覗き見た貴方の所謂「白い河床」なるものが、如何なるものであるか知って頂



論、講談社、昭和四十八・六)。奥野は、井上靖こそ、伊藤整の言うところの仮面紳士の典型であり、あるいは〈伊藤整の想定した仮面紳士のもうひとつ奥を行く仮面紳士ではないか〉とし、井上靖の本質に〈アマモラルな指向、きわめて強い好悪、美醜の本能、悪魔的と言つてよい耽美へのめりこみ、破壊と呪詛への傾斜〉などをあげた。  
(以上、『新研究資料現代日本文学 第二卷 小説Ⅱ』(明治書院、二〇〇〇年)より)

きたい)ので、別便にて三通の手紙を送る、という内容であった。翌日、三杉宛の三通の手紙が〈私〉に届けられた。ひとりの男の十三年間にわたる不倫の恋を、妻・愛人・愛人の娘の三通の手紙によって浮彫りにした恋愛心理小説。  
△初出▽ 『文學界』昭和二十四年(一九四九年)十月号

【著者プロフィール】

(一九〇七年(明治四十年)・一九九一年(平成三年)) 日本の小説家。文化功労者、文化勲章受章。井上家は静岡県伊豆湯ヶ島(現在の伊豆市)で代々続く医家である。一九三六年京都帝大卒業。『サンデー毎日』の懸賞小説で入選(千葉亀雄賞)し、それが縁で毎日新聞大阪本社へ入社。一九五〇年『鬨牛』で第二十二回芥川賞を受賞。小説は現代を舞台とするもの(『獵銃』、『鬨牛』、『氷壁』他)、自伝的色彩の強いもの(『あすなる物語』、『しるばんば』他)に加え、歴史に取材したものに大別される。『私の自己形成史』の中の〈自然との奔放な生活〉には「この少年時代を過ごした原籍地の伊豆が私の本当の意味での郷里であり、ここで私という人間の根底になるものはすべて作られたと考えていいようである」と記している。

参加者…8名  
進行…芹澤

感想

## 【会の記録】

## 感想や意見

・面白かった。時代は古臭くても、一篇の恋愛小説として感情移入しながら読むことができた。

・「天平の甕」や「おろしや国酔夢譚」などの歴史小説の作家だと思っていたので、現代物は新鮮だった。登場人物たちがみなセレブだと感じた。

・テーマが重いと感じた。「風林火山」の作家として馴染みがあったが、本作も非常に面白かった。三杉穰介の内面が読むほどにわからなくなる感覚があった。不気味な存在。

・四十代の作家がよくぞここまで女性心理を描き出せるものと感じた。しかも書簡体という離れ業に挑戦してものにしていてと思う。いわゆる私小説でなくこのリアリティはすごい。

・濡れ場がない、というのが印象的。これは功罪両面があるのでは？

・一方でものすごく古く感じる点もあった。十三年も不倫を続けるなど、現代の感覚からいえばさっさと離婚を選択する方が自然かと。

・三人の女性の独白の中で同じシーンが語り直されるのだが、微妙にそれぞれが重ならず、お互いがお互いをいつも違う角度からまなざしており交差しない。そこに三者三様の孤独や悲哀が浮かび上がっているように思う。人の気持ち、人の本質を捕まえるのはきわめて難しい。

・不快な作品。みどりも彩子も愛されたいタイプなのに、同時に、相

意見

手を選びたいという願望も持ち、我儘だと思う。業が深い。

・〈私〉の立ち位置、役割とは何なのか？ どんな意味がある？

・三杉が抱えている猟銃とは何のメタファーになっているのか？

・薔子の人物造形がとても作作的に感じた。彼女が孤独に去っているラストにも納得が行かない。もつと他の選択肢も取り得るのでは。

・みどりの人物像に対して解説ではダメだしがされているが、実は三人の女性の中でも最も起伏に富んだ、奔放さとナイーブさを兼ね備える奥行きのある女性だと感じた。アプレゲールのような印象。

・みどりの中にある穰介への執着や思慕、愛憎半ばする感覚は、彩子の門田へのそれと同様、女性の持つ複雑な感情としてとてもリアリティがあるものとして受け止めることができた。

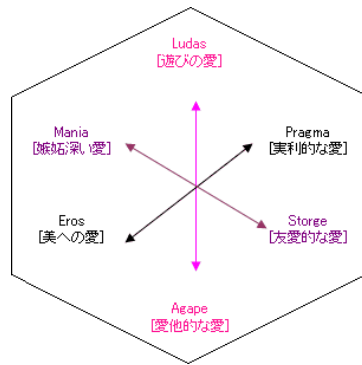
・戦中〜戦後は旧民法の戸主制で、彩子は婿取りでもある。であれば当然彩子の姓がテクスト上に浮上してきて良さそうなものを、終始隠ぺいされている不自然さ。「門田」彩子を意識させると共に、彩子の門田への執着がそこに込められているのか？

・彩子の「不倫が露見したら死ぬ」という考え方はいかにも日本的だと感じる。仮にキリスト教であれば、バレるかバレないかよりも、既に罪を犯したという一点で常に断罪し続けるのではないか。

・女性たちはみな「予感」や「予兆」に敏感で、たびたび描かれる。しかし三杉穰介の内面理解に対しては、その優れた直観がほとんど働いていないように感じられる。

6つのラブスタイルの説明

ラブスタイル	説明
エロス (美への愛)	恋愛を至上のものと考えており、ロマンティックな考えや行動をとる。相手の外見を重視し、強烈な一目惚れを起こしやすい。
ストルゲ (友愛的な愛)	穏やかな、友情的な恋愛。長い時間をかけて、知らず知らずのうちに愛が生まれると考えている。異性の容姿に対する理想はあまりもっていない。
ルダス (遊びの愛)	恋愛をゲームとしてとらえ、楽しむことを第一に考える。相手にあまり執着せず、相手との距離をとっておこうとする。複数の相手と同時に恋愛ができる。
マニア (熱狂的な愛)	独占欲が強く、些細な事柄にも嫉妬や執着、悲哀といった激しい感情をとまなう。それゆえ、関係をなかなか安定させることができない。
アガペー (愛他的な愛)	相手の利益だけを考え、相手のために自分を犠牲にすることもいとわない。パートナーに対して親切で優しく、またその見返りを要求しない。
プラグマ (実利的な愛)	恋愛を地位の上昇などの手段と考えている。相手の選択においては、社会的な地位の釣り合いなど、いろいろな基準を立てている。



愛の種類

1. 古代ギリシアにおける4つの愛

- ① エロス(性愛)：自己を充実させる愛
- ② アガペー(真の愛)：神への愛。ある者を他よりも優遇する愛
- ③ ストルゲ(家族愛)：風、火、水、土を結合させる愛
- ④ フイリア(隣人愛)：友愛、友情、友人の友人に対する愛

2. 恋愛と性愛をめぐる(エロスの形式)

- ① 異性愛
- ② 同性愛
- ③ 純愛(性あり)
- ④ プラトニックラブ(性なし)
- ⑤ ロマンチックラブ ↑ ↓ モノガミー(一夫一婦制)
- ⑥ 婚外恋愛(不倫)
- ⑦ 複数恋愛(ポリアモリー)
- ⑧ 無性愛・非性愛(性衝動を持たない)

自己超越

